

「わたしをみつけて」それから…

NHKドラマ「わたしをみつけて」にリスペクトを捧げつつ、設定をお借りして勝手に書いた、その後の物語です。

オリジナルのドラマについては、NHKの公式サイトをご覧ください。

登場人物

- ・ 山本弥生…星見ヶ丘病院准看護師。小さい頃に親に捨てられ、以来、人に心を閉ざして生きてきた。一昨年、入院してきた老人・菊地や新任師長・藤堂との出会い、そして同僚の悩みに深く関わることで、周囲に心を開くことが出来た体験を持つ。
- ・ 神田恵美子…星見ヶ丘病院正看護師。小四の息子と二人暮らし。夫の浮気が原因で息子が小さいときに離婚。一昨年、恋人のDVに苦しめられるが、弥生をはじめ、病院を挙げての支えで乗り越えた。
- ・ 五十嵐菜奈…星見ヶ丘病院正看護師、第一ナース室主任。師長が不在なので、事実上、師長格。
- ・ 後藤雅之…星見ヶ丘病院副理事長兼事務長。父である啓一郎の後を継ぐため医師を目指したが、どうしても

血を見ることが出来ず、事務方として後継を目指している。

- ・ 後藤啓一郎…星見ヶ丘病院理事長。昨年3月まで院長を兼務していたが、院長の方は院外から招いた浜田惣太郎に譲った。一昨年、医療ミスを起こし、患者を死なせるところだったが、弥生や当時の看護師長の働きで事なきを得た。
- ・ 関美千代…星見ヶ丘病院正看護師。
- ・ 飯野七海…星見ヶ丘病院准看護師。
- ・ 佐久間…星見ヶ丘病院外科医師。
- ・ 浜田惣太郎…昨年4月より星見ヶ丘病院院長。
- ・ 神田勇太…神田恵美子の息子。小学四年。

山本弥生が藤堂師長の誘いを断り、星見ヶ丘病院に残ることを決めてから、1年余りが過ぎていた。

この1年だけでもずいぶんいろいろなことがあったと、弥生は定時制看護学校の2年に進級した時、あらためて思うのだった。

1年前の3月。

病院の体制が大きく変わった。

理事長兼院長の後藤啓一郎が、退任を表明したのだ。

一昨年、診断のミスで誤った手術を行い、患者を死なせる寸前だったが、弥生と当時の藤堂師長が、誠を覚悟で患者を転院させ、結果的に事なきを得た。しかしそのとき既に、引退することが責任を取る道だと決め、タイミングを見計らっていたのである。

院長の後任は、すぐに見つかった。啓一郎の同期の身内である浜田惣太郎という外科医で、地方で開業していたが、その地域も過疎化が進み、経営に苦勞していたという。腕はいいらしい。

会ってみると、人格的にも申し分なく、患者やスタッフを大事にしながらやっていこうと思ひ、即決したのだ。

理事長職は、当然、息子の雅之に譲るつもりをしていた。

でも雅之は、いきなりの理事長は荷が重過ぎると固辞したため、ひとまず啓一郎が理事長に残り、雅之を副理事長兼事務長にして、後方から見守ることにしたのだ。

病院には求められた時以外、顔を出さず、出来るだけ雅之に判断させていたが、1年も経つと、呼び出される回数もずいぶん減ってきたと思う。

一抹の寂しさを感じないわけでもなかったが、妻と二人で旅行に行ったり、リタイア組の仲間とゴルフに行ったりという生活も、日常になりつつあった。

弥生が看護学校に行き始めたのも、病院の制度改革によるものだった。

弥生に、いずれはナースを率いる立場に就いてもらいたい、そう思った雅之が、勤務実績が優良な准看護師を、業務命令として、正看護師の道に進めさせることにしたのだ。

働きながらの通学なので、3年間と年数はかかるが、准看護師には大きな希望を与えたようだ。

そしてその第一号に、弥生が選ばれたのである。

業務の一環なので、費用は全面的に病院が負担してくれる。

そのかわり、卒業後5年間は、星見ヶ丘病院で働く義務を負う。万一、病院を離れる場合は、学費を返還する取り決めとなった。

もちろん、弥生にとって、そんなことは何の問題でもなかった。元々、この病院こそが自分の居場所と決めていたので、5年どころか、ずっと、いられるまでここにいたいと思っていたからだ。

勤務のシフトも、業務命令なので、通学に最大限の配慮を

してくれる。

まあそれでも、1、2カ月に一度くらい、手術が立て込んだりで、どうしても学校を休まなければならなくなるのはやむを得ないが。

藤堂が抜けた後の第一ナース室は、後任の師長に、五十嵐菜奈が抜擢された。でも五十嵐もまた、「藤堂師長には遠く及ばない」とこれを辞退、ひとまず主任として、全体を見ていくことになった。

本来であれば、入院患者と手術を担当する第一ナース室と、外来専門の第二ナース室は、1年ごとに3分の1程度が入れ替わるのが通例だった。

しかし、現在、師長がいないこと、また准看とはいえ、ベテラン並みの働きを見せている弥生が、3年間は日勤専門になることから、当面は異動をせずに固定化させようと、第二ナース室の師長から提案があったのだ。

さて、看護学校の“2年生”として、気持ちもあらたにスタートを切った弥生だったが、最近、すこし気になっていることがあった。

神田恵美子が、また、元気がないのである。そしてそれは、弥生だけでなく、次第に皆の気付くこととなっていく。

「また前のDV男が現れたんじゃないの？」

半分は心配、半分は興味本位で、無責任に噂する同僚たち。
でもそれを、五十嵐はすぐに咎めた。

「ちょっとあなたたち、想像で何をいってるの？ 心配なら
まず聞いてみなさいよ。仲間でしょ？」

「主任、その言い方、藤堂師長に似てきましたね」

相変わらずお調子者の関美千代が混ぜっ返す。

でも五十嵐は笑わず、美千代を軽く睨んで言った。

「まあでも、確かに心配は心配よね。分かった。私がちゃんと聞くから、みんなはそれまで無責任なことを言わないように」

「ハイ、五十嵐“師長”と、敬礼する美千代。

これには五十嵐も苦笑するしかなかった。

その日、帰り際に、弥生は五十嵐から呼び止められた。

「山本さん、ちょっといい？ 神田さんのことなんだけど」

「はい……」

「最近なんか元気ないでしょ。山本さん、何か聞いている？」

「あ、いえ、私も気になっていたんですけど、勤務が終わったらすぐに学校に行かなくちゃならないので、話す機会がなかったんですよね」

「そっかー。神田さん、一昨年的一件以来、山本さんのことをすごく信頼しているみたいだから、何か話しているかなと思って」

「すみません…」

確かに、自分が聞くべきだったかもしれない…。そう思って、弥生は心から申し訳なく思った。

でも五十嵐は、弥生の表情から心の内を察したのか、明るく言った。

「いいの、いいの。そんなの、主任である私の役割なんだから。でも、近々聞いてみようと思うんだけど、山本さん、一緒に聞いてくれる？」

「はい、もちろん」

「ありがとう。じゃあ、明後日、三人のシフトが揃うし、今のところ手術の予定もないし、どうかしら」

「わかりました」

「じゃあ、よろしくね」

それだけ言うと、五十嵐は更衣室を出て行った。

弥生はしばらくボーッとしていたが、時計を見ると、慌てて着替えを済ませ、学校に向かった。今日は昼食を食べる時間が取れないかもしれない。

今の弥生のタイムスケジュールは、朝の8時から正午までが勤務、そのあと、午後1時半から夕方5時までが授業である。週に1回は全日授業もあって、感覚的には「ほとんど仕事ができない」という気がしていた。

そのため弥生は、授業のあと病院に戻り、夜9時ぐらいまでなら勤務できると申し出たのだが、主任の五十嵐からも、事務長の雅之からも止められた。

五十嵐は、「学校に行けば分かるけど、家に持ち帰る課題も多いし、絶対に無理」と、自身の体験からストップをかけた。

そして雅之は、「山本さんなら真面目だし、根性もあるから、こなせるかもしれない。でも、あとに続く人たちが、『そこまでしなければならなかったら、自分には無理』と、悪い前例を作ってしまう。

後輩たちがこの制度に希望を持てるように、少し緩やかにしておきたいんだ。

学校に通う時間は勤務時間と規定しているんだから、堂々として行ってきて下さい」と、将来を見通してそう言うのだった。

雅之の言葉は、少しだけ弥生を感動させた。

(ああ、事務長は本当にいろんなところに気を配りながら、病院の将来を考えているんだな)

医者にはなれなかったけど、父親と違ったアプローチから、

この病院を盛り立てていくんじゃないか——弥生はそんな予感がするのだった。

そして実際に学校に通ってみると、本当に五十嵐の言う通りだった。

課題は多いし、ないときでも予習復習は欠かせない。

夕飯はカレーと決まっていた弥生の習慣が、ここで大きく役に立ったのは言うまでもない。休みの日に一週間分を作り置いておく。ただ、カレーと一緒に必ず食卓に乗っていた豆腐を毎日買いに行けないのが、ちょっと辛かった。

いつも買う自宅近くの専門店の豆腐は、スーパーで売っている大量生産のパック詰めと違って、買ってもしせいぜい2、3日しか持たない。

豆腐は、休みの日とその翌々日までしか食べられない「ご馳走」になった。

★ 2

五十嵐と話をしていて、微妙に昼食の時間が取れそうもないと判断した弥生は、何か買い置きのもので済まそうと、家に寄ることにした。

看護学校に通い初めて1年、朝は家から病院、昼は病院か

ら学校、そして夜は学校から家へと、三角形の道のりを判で押したように繰り返してきたので、この時間に自宅へ向かうのは、景色も朝とは違い、新鮮だった。

もうちょっと時間があれば、豆腐も買えたのになあ、と、少しだけ口惜しがりながら、神田の家の前の児童公園に差し掛かった時だった。小学生らしき男の子が、ブランコに乗って、漕ぐでもなく、ぼんやりと揺られていた。

神田の一人息子、勇太だった。

弥生とは、むろん、顔見知りである。神田がDVを繰り返す恋人と別れるのにすったもんだした時、まだ二年生だった勇太を何度か預かり、時には家に連れて行って食事を出したりもした。

その男と何とか別れられ、落ち着いてからは、勇太の顔も見えていないが、弥生は、小さな友だちのような感覚を勇太に向けていた。

「あれ、勇太君？」

弥生は思わず声をかけたが、勇太はビクッとして弥生の顔を認めると、走って自分の部屋に駆け込んでいった。その時初めて、今日は平日であり、勇太がこの時間に家にいるはずがないことに気付いた。

具合が悪く学校を休んだのだろうか。でもそれなら、いくらアパートにつながっている公園とはいえ、外で遊んでいるはずがない。弥生は自転車から降りると、部屋のチャイムを押しした。

「勇太君、私よ、弥生。いるんでしょ？ 具合、悪いの？」

何度かチャイムを押しながら声をかけるのだが、反応がない。

神田は今日は弥生と入れ替わりの出勤で、今は病院に向かっている頃である。

弥生は神田の携帯に電話してみたが、応答はなかった。一瞬、考えて、五十嵐に電話してみる。五十嵐はすぐに出てくれた。

「あ、主任ですか、山本です。実は今、神田さんのアパートを通りかかったら、勇太君の姿を見かけて。

勇太君、すぐに部屋に入っていったので、具合でも悪いのかなって呼んでみたんですけど、返事がないんですよ。

神田さん、出勤の途中なのか、電話が繋がらないし、ちょっと心配で…」

だいたい、そんな内容のことを何とか伝えると、五十嵐の返事を待った。

「うーん、勇太君って、4年生だったよね。留守番も慣れている子だし、山本さんはまず学校に行きなさい。大丈夫だから」

五十嵐は、何か感じるものがあるのか、力強くそう言った。「神田さんが来たらちゃんと伝えるから。事情、話してくれそうだったら、もう今日のうちに聞いてみるし。大丈夫よ、あとでメールするから」

五十嵐の二回目の「大丈夫」に押されるように、弥生は自転車を漕ぎ出した。

結局、昼食はあきらめざるを得ない。学校に着いたら自動販売機の飲料で紛らわせるしかないか——そんなことを考えながら、ペダルを漕ぐ足に力を込めた。

講義の合間合間に、弥生は何度か携帯を手にしてみた。でも、その日、五十嵐からのメールは届かなかった。

それほど心配する事態ではなかったのかもしれない。具合が悪くて休んだけれど、だいぶ良くなり、退屈になってつい出てきたとか。それを咎められるかと思い、部屋に逃げ込んだのかもしれない。

でも…。

一人寂しそうにブランコに乗っていた勇太の儂げな姿を、弥生は忘れることができなかった。

あくる日。

弥生は20分ほど早く、家を出た。今日は神田と同じシフトである。もしかしたら話をする時間が取れるかもしれない。そんな期待もあって、自転車を漕ぐ足にも力がこもった。

病院に着き、更衣室に入ると、果たして、神田は弥生を待っていた。神田も、弥生と話したかったようである。

「山本さん、昨日はすみません」

神田がまず謝ってきた。あの、誰にも小さくなっていた頃の声をしていた。

何があったかは分からないけど、その声が弥生には哀しかった。

「神田さん、お願いですから、またそんなふうに謝らないでください。

あの時、勇気を出して乗り越えて、強いお母さんになったじゃないですか。

「一体何があったんですか？」

「すみません…」ともう一度言いかけて、

「あ、ごめんね、違うの。山本さんには本当に支えてもらったから、何かあると、つい弱い自分が出てきちゃうのよね。

それが情けなくて」

「神田さん…」

「昨日、五十嵐主任から、山本さんが勇太を見かけた時の話を聞いて、ああ、やっぱり山本さんに関わってもらうことになるのかなって思ったの。

でも山本さんなら、弱い自分を見せられるなって、そう思って。それでさっき山本さんの顔を見た時、なんかフツと気が緩んじゃったのかもね。

変よね、私の方がずっと年上なのにね」

神田が寂しそうに笑った。公園でブランコに揺られていた勇太の姿が重なった。

「神田さん、もしかしたら、勇太君に何かあったんですか？」

神田が顔を上げて弥生を見つめた。

「うん…。

勇太がね、ちょっとしばらくおかしかったのよね。それで思い切って、心療内科に連れて行ったの。

子どもだから、胸のうちを聞き出すのに、先生もずいぶん時間がかかったんだけど、ようやく診断がついて…。

それでね、あの男からDVを受けていたことがきっかけのPTSDだって言われたの…」

神田がそこまで話したとき、更衣室のドアの向こうが騒が

しくなってきた。同じシフトの出勤組がやってきたのだろう。

早めに出てきた分の20分は、あっという間に過ぎ去っていった。

「明日、主任と3人で、ね。全部話すから」

神田はそう言うと、何事もなかったように、更衣室に入ってきた同僚たちとあいさつを交わしながら、部屋を出て行った。

次の日。

手術はなかったものの何かと忙しく、結局、弥生が病院にいる間に話をする時間は取れなかった。それで、弥生の授業が終わったあと、外で会うことになった。

といっても、神田は帰って勇太の世話をしなければならない。結局、神田が家に帰っている間に弥生と五十嵐が食事を済ませ、そのあと、神田のアパートに行き、前の公園で話すことにした。まだ4月半ば、夜になると肌寒いときもあったが、この日は夜になっても穏やかだった。

弥生たちが神田の家に着くと、勇太の食事もちょうど終わったところみたいだった。

弥生は部屋の中に顔を突っ込んで勇太を見付けると、「勇太君、こんばんは」と声を掛けた。一昨日、見掛けたことに

は触れなかった。

勇太ははにかむように微笑むと、奥に引っ込んでいった。弥生たちが来ることは聞いていたのだろう。

五十嵐も、奥に向かって声を掛けた。

「ちょっとお母さん借りるからね」

神田は奥に行くと、

「すぐ前にいるから心配しないでね。戸、開けておいてもいいから」

と、母親らしい、包み込むような声で諭した。弥生は、4年生なんだし、そこまで大事にしなくても、神田さん、本当に勇太君が大切なんだと、最初は微笑ましくその声を聞いていたが、PTSDを発症したことと関係があるのかもしれないと、すぐに安易な発想を打ち消した。

思った通り、勇太は、乳飲み子のように神田にまわりついていることを、このあと聞かされたのである。

★ 3

ベンチもない児童公園である。

三人はブランコに並んで腰を降ろした。さすがに、子どもたちが遊びに来ることはない時間である。アパートの人に聞かれない程度に、神田は声を落として話し出した。

「本当は主任や山本さんには、早く話さなければと思っていただけけど…。私、実は、3カ月ほど前、佐久間先生に交際を申し込まれたんです」

弥生は吃驚して、思わず「え？」と聞き返したが、五十嵐がそれ以上に素っ頓狂な声で驚いて見せた。

「うっそー！ だって病院では全然そんなそぶり見せなかったでしょう」

時々、五十嵐に突っ込まれながら、神田が話した佐久間との交際、そして勇太のPTSD発症は、だいたいこんな話だった。

昨年の暮れ、神田は、突然、佐久間から声を掛けられたのである。勤務が終わったら話がある、と。

それまで、神田は、佐久間とプライベートな話をしたことはほとんどなかった。神田も佐久間も、病院ではあまり目立つ方ではなかったからかもしれない。

神田が変わったのは、DVを振るっていた男と別れてからである。ただ、勇太のために別れる決心をしたとはいえ、一筋縄ではいかなかった。

暴力もストーカー行為も日に増してひどくなり、ついにはナース室まで乗り込んで、居合わせた看護師たちを威嚇する

こともあった。

そんな事態に手を差し延べてくれたのが、まだ院長だった後藤啓一郎と、そして、弥生が変わるきっかけを作ってくれた、菊地だったのだ。

たまたま男がナース室で騒いでいるところを啓一郎が目撃し、神田から直に事情を聞くと、病院で顧問契約をしている弁護士を付けてくれたのである。

一方で弥生も、自分が関わったことがこういう事態を招いたことに責任を感じ、個人的に菊地に相談していた。

ボランティアで地域の防犯活動をしていた菊地は、警察署の生活安全課とのつながりもあり、さっそく警察に相談してくれた。菊地が信頼されていたためか警察もすぐに動いてくれ、男の会社にまで知られることになって、男は会社から、退職か遠い支店への転勤か、二者択一を迫られた。

結局、こういうご時世、職を失うことに強い不安を感じたのだろう、男は転勤を選ぶしかなかった。そして転勤の際に、弁護士は、今後一度でも姿を見せたら高額の慰謝料を支払う念書を作成し、男に署名を迫った。

警察の睨みも効いていたので、男は署名をすると、逃げるように神田のもとを去っていった。神田は完全に自由になったのである。

そのことが、神田の心も変えたのだろう。誰に対しても小さくなっていた神田は、明るく、そして患者とより深く関わる看護師になっていった。

もともときれいな顔立ちでもある。バツイチ子持ち、ということも知れ渡っていて、「苦労を背負いながらも、明るく、親切的な看護師さん」という評判が立つまで、時間はかからなかった。

そして佐久間――。

中堅医師として、啓一郎がいるときから、執刀医を務めたりしていたが、やはり啓一郎の陰に隠れ、目立ってはいなかった。手術も、患者が啓一郎の執刀を言外に望むこともあって、助手を務める方が多かった。

そんな佐久間が変わったのは、啓一郎が院長を降り、新たに招いた浜田惣太郎が就いてからである。

浜田は雇われ院長で、経営の深いところは関わらなくても良かったので、自身の役割としては、適材適所、人を活かすことに力を注いだ。そうした中で、佐久間を、次の世代の中心的存在に育てようと、責任の分担も増やしていったのである。

期待されていることを感じたのか、佐久間も、スタッフ同

士のコミュニケーションに気を配ったり、何より、腕を磨き、研究にもさらに熱心に取り組むようになった。

看護師たちには、軽口を叩いたりすることはあまりなかったが、何かと声を掛けたり意見を聞くよう努めていたので、だんだん信頼されるようになっていった。

実際、神田も、佐久間を「変わったなあ」と思いながら眺めていた。後藤院長の頃は、院長一人がこの星見ヶ丘病院の象徴と言ってもよかったが、今は浜田院長や佐久間をはじめ、それぞれの医師に“ファン”が付いている。

と言って、派閥争いをするわけではもちろんなく、医師それぞれが「頼られている存在」として、患者の中に溶け込んでいる気がする。

ただ、佐久間を男性として見たことは、一度もなかった。

実際、シングルマザーとして小学生の男の子を育てるのはけっこうたいへんだっし、バツイチで、しかも詰まらない男につきまとわれ、病院にも迷惑をかけたことから、当分、恋愛には近付かなくていいと思っていたのである。

ところが、佐久間は佐久間で、神田のことがなんとなく気になる存在になっていた。

ドクターの中には、暇なときにナース室に油を売りに行く

者も何人かいたが、佐久間は元々、そういう“タイプ”ではなかった。

後藤院長時代は、仕事に消極的だったわけではないが、院長の存在が大きすぎて、ドクター陣もピラミッド型のヒエラルキーではなく、逆“T”の字型を形作っており、院長一人が突出した存在だった。

しかし浜田院長になってから、そういう“重し”が取れたのか、医師たちもまた、今まで以上に個性を際立たせるようになり、存在感を増していったのだ。

そうした中で、佐久間は院内にも目配せするようになったのだが、初めは、神田個人に惹かれたというよりも、「患者たちの間で評判が高まっていく看護師」として、神田に目がいくようになったのである。

しかし、その“単なる関心”が好意にかわっていくのに、こちらもそんなに時間がかからなかった。

以前、よくない男につきまとわれていたのはもちろん聞いている。しかし、後藤院長がその解決を後押ししてくれたらしいから、神田の側に責めを負うような理由があったのではないだろう。

見ていると、その後、とくに浮いた噂も聞いたことはない。同僚看護師やドクター連中からも、小学生の子どもを育てな

がら、一生懸命に頑張っているという話ばかり聞こえてくる。

いつしか、自分が、そんな神田を支えてあげる関係になれば——気が付いたときにはそんな気持ちが募っていた。

よしっ、思い切って声を掛けてみよう——そう自分の気持ちに決着を付けたのが、去年も暮れにさしかかっていた頃のこと。これは神田があとから佐久間に打ち明けられたのだが、そんな経緯だった。

佐久間から想いを告げられた神田は、もちろん初めは、只々、驚くばかりだった。

新たな恋など考えていなかったし、佐久間をそういう目で見ただけでもなかったから。しかし、佐久間から打ち明けられたとき、自分の中に、勇太と一緒に育ててくれるパートナーがいたら——そんな気持ちがどこかに眠っていたことに、初めて気付いた。

しばらく悩んだが、佐久間に悪い印象は特にはない。むしろ、いろいろな面で信頼できるドクターの一人だと思っている。そして、神田の心の中に、勇太を真ん中に三人で手を繋いで歩いている姿が自然に浮かんだとき、佐久間の申し出を受けたのである。

ただ、あくまでも勇太の気持ちを第一に考えたい、という

神田の申し出を、佐久間は当然のごとく受け止めた。

いきなり、父親候補として会わせるのではなく、お母さんが病院で仲良くしてもらっている同僚の一人として、できるだけ自然に、勇太に引き合わせる努力をした。勇太は、多少、戸惑いを見せたものの、ごく自然に、佐久間の存在を受け入れていった、ように見えた――。

★ 4

初めのうちは、デートといっても、必ず三人で会うようにしていた。

勇太は特に人見知りする方ではなかったが、母親の目から見ると、やはり佐久間に対しては、どこか微妙にぎこちなさを感じることもあった。

四年生なので、「お母さんの新しい恋人」ということも、気付いているに違いない。それが、この微妙な距離感なのだろうと、初めは思っていた。

そうした中で、佐久間も神田も、そろそろ二人だけの時間を持ちたい、という気持ちも募っていった。そして一カ月ほど前、初めて二人きりで逢ったのである。

もともと勤務時間が不規則なのは、十分慣れている勇太である。緊急の措置で二時間、三時間の残業になることも少な

くない。一本の電話を入れておけば、そういう時のために用意している食事を自分で食べ、明日の仕度を自分でして、一人で寝ることもできる。

なので、佐久間と二時間ほどの逢瀬を持つことに、特にうしろめたい気持ちはなかった。

しかし、その晩――。

勇太が、夜中に突然叫び、神田の布団にもぐり込んでしがみついてきたのである。

きっと怖い夢でも見たのだろうと、初めは軽く考えていた。しかしその“現象”は、その日から毎日続いたのである。

それでも、神田にくっつきながら眠れたときは、まだ良かった。起きて、何とか学校にも行くことができた。しかし時には、朝まで震えて寝られない日もあった。そうなると、次の朝は、学校に行くどころではなかった。

もう、ふぬけたように、目の焦点が定まっていない気がした。学校は休ませるしかなかった。そしてそんな日が何回か重なると、さすがに担任の先生が、心配して来たのである。1年半前に虐待を受けたことを知っている担任は、心に何か影を落としているのではないか――そう指摘し、専門医に診せることを促した。

神田も、そこはさすがに医療に携わっている身である。自

身、薄々、そのことを疑っていたこともあって、素直に従った。

最近では、外科の入院患者にも、うつ“病”まではいかなくても、うつ“傾向”に陥る人が、格段に増えている。看護師も、そのことを意識した対応をしないと、あらたなメンタルヘルスを発症しかねない。

そういう研修も、看護師たちは順番に受けてきた。なので、精神科や心療内科の受診を、外聞を気にしてためらうことが何のプラスにならないことも、よく分かっていた。

勇太の場合、けっこう早くに診断が着いた。直接的な原因は、1年半前のDVにある——そう見当を付けていたことが、早期の診断につながった。

ただ、単純なフラッシュバックではなく、きっかけは佐久間の登場だった。

あの時、勇太にとって一番辛かったのは、自身が虐待を受けたことよりも、大好きな母親が目の前で暴力を受けながら、それを庇えなかったことだった。

男と別れて平穏な生活を取り戻したといっても、それはずっと心の中に闇として眠っていたのである。

そして佐久間という男が、今また、母親との二人の世界に

闖入してきた。

確かにやさしい人だった。自分にはもちろん、母親にも、少なくとも自分の見ている前では、手を上げることなどなかった。

でも最近、どうやら自分のいないところで二人で逢っているみたいだ。自分のいないところで、もしお母さんがぶたれたりしていたらどうしよう。自分はまたお母さんを守ることができないのか。あの時よりも、大きくなったのに――。

そんな不安が津波のように心に押し寄せ、ついに防波堤が壊れたのである。それ以来、勇太は必要以上に母親に強く依存するようになっていった。とにかく、無事な母親の姿を見ていないと気が休まらない。不安になるのだ。

学校も、何日か休んだあと、何とか行くには行ったが、心ここにあらず――という勇太の様子に担任はすぐに気付き、かつての虐待と結びつけた。そしてその日のうちに、母親に連絡したのである。

診断は付いたものの、治療方針は簡単に立たなかった。

神田は初め、佐久間と別れば勇太が元に戻るものと簡単に思っていた。実際、そのことを佐久間に話し、ひとまず、付き合いをなかったものにしようとした。

しかし、スイッチを切ったら灯りが消えるようには、勇太の“症状”は簡単に治まることはなかった。

心療内科の医師は、それは当然だ、と説明した。

もともと自分の中にあった、「お母さんを守れなかった」という負い目を、無意識のうちに心の内にしまい込んでいただけである。それが意識と無意識の中間に噴出してきて、不安感や不眠などの具体的な症状を引き起こしているのである。

時間が解決する場合もあるが、医師は、「あなたも、あなたの新しい恋人も医療に携わる人だから」という前提のもと、三人で積極的に乗り越えていくことを提案してきた。

「もちろん、こうすれば良い、という明確な解決の道筋は、今はありません。いろいろ試行錯誤し、勇太君の反応をきちんと見ながら、その都度、次の一歩を見付けていくしかないと思います。でも、時間による解決よりは、より根源的な克服になるはずです」

そう医師に説明され、神田はその提案を、一旦は受け入れた。

しかし問題は佐久間である。

まだ付き合いだして日も浅い。そこまで佐久間に求めるほ

ど、二人の絆が確かなものになったとは言い難い。佐久間に重いものを背負わせるよりは、今、ほんのわずかばかりの二人の思い出を、無かったものにする方が、佐久間にとっても、この先の人生の可能性を広げることになる。

そこまで考え、神田は佐久間に別れを告げた。それが、先週のことだったのである。

「それで、佐久間先生は何て？」

神田恵美子の長い話が、やっと“今”に追いついたところで、五十嵐菜奈の矢継ぎ早の質問が始まった。弥生も聞きたいことはいっぱいあったが、まずは、上司でもある五十嵐に譲るべきだと思った。弥生はいくつもの質問をひとまず飲み込んだ。

「佐久間先生はね、自分にも背負わせてと言ってくれたんです」

神田は淡々と答えた。

勇太のPTSDが分かったとき、「付き合っていなかった時」に戻れば、勇太も元に戻るのではないかとの、二人の単純な発想に対し、担当の医師は、「三人で乗り越えたら」とアドバイスしてくれた。

それは二人が医療のプロであることに依るところが大きかったが、佐久間は、別の感慨を抱いた。医師だから、ではなく、この先、本気で家族として母子二人を支えていく気があるのかどうかを、何者かから突き付けられたような気がしたのである。

だから、神田から「あなたは私たちに縛られないで」と言われたとき、言下にそれをはねのけた。

二人を家族として迎えるのではなく、自分が、二人の家族になりたい、今、心からそう思っていることを伝えたのである。

「あらー、佐久間先生って、真面目なだけじゃなくて、なんていうか、男気もあるのね」

五十嵐は微笑みながら弥生に同意を求めた。弥生も笑顔を返す。

「じゃあ何も心配すること無いじゃない。そりゃ、治療はこれから辛い道のりを歩むかもしれないけど。でも佐久間先生がそこまで支えてくれるって言うのなら。それとも佐久間先生の想いに、何か不安を感じたりするの？」

「いえ、そんなことはないです。佐久間先生の誠意は、本当にありがたい限りで…」

「じゃあ、何？」

「やはり勇太のことなんですよね。本当に三人で乗り越えていくことが、勇太のためになるのかどうか。

三人で乗り越えていくっていうことが、治療のプロセスとして有効だっていうことは、それは私にも分かるんです。

でも佐久間先生とお付き合いしたことが勇太の心を壊すきっかけになったのに、勇太が、乗り越えていくまで耐えられるのかどうか。もしかしたらもっと悪くなるんじゃないか、って」

「その点は、担当の先生はなんて仰ってるの？」と五十嵐。ふいに看護師の顔になっている。

「可能性はゼロではない、って。でも、心の中の闇を、ただ目をそむけて忘れさせるだけなら、いつまた顕れてくるか分からないし、それは大人になっても変わらないって仰るんです。

それよりも、今は年齢的に無理だとしても、10代後半くらいからなら、それを客観的に見られる自分を作ることができる、って」

神田は話しながら、やや涙声になっていた。

「分かった。とにかく、あなたが今、元気がないのは、そのことなのね。いずれにしても、今ここで結論を出せることではないから、私も考えてみる。

とにかく、あなたが元気がないと、他のナースへの影響も

大きいし、なにより患者さんがそういうことに敏感だから。

大丈夫、若いナースにはお調子者やちゃっかりさんもいるけど、みんな、あなたの味方だから。そうよね、山本さん」
「え？ は、はい！」

急に振られた弥生は、神田に釣られたのか涙目になっている。でも、自分にできることは何でもしてあげたい——既にそういう気持ちだけは固まっていた。

「で、みんな心配しているんだけど、どこまでなら話してもいいかしら」

たぶん、五十嵐が一番聞きたかったことかもしれない。
「ええと…」

神田もすぐには思い付かない。

「佐久間先生とお付き合いしていることは、まだ内緒にしておくつもりなの？」

「……勇太のことがなければ……」

ちょっと言い淀みながら、神田は続けた。

「二人だから話すけど、まだ言葉として正式にプロポーズされてはいないんですけど、佐久間先生は、結婚のこと、考えて下さっていると思うんです。プロポーズもまだなのに、将来のことはいろいろと話してくるから…。

だから勇太のことがなければ、正式に結婚を申し込まれた

ら、ちゃんとみんなには話さなければと思っていました。
でもこんなことになって…。

佐久間先生とのこと、私、まだどうしたらいいのか、はっきり決められないんですよね。何か、あの時と同じよね」

神田は弥生に顔を向け、自分を嘲笑うような顔をした。

“あの時”というのは、弥生にはすぐに分かった。一年半前、神田母子が男からDVを受けていたのを見つけた時のことである。

子どもを虐待するような男とはすぐに別れるべき、と、弥生が強く訴えたときに、神田は、「あの人に捨てられたくない」と、一度は男を庇ったことがある。

「神田さん、あの時とは全然違うと思います」

今日の話の中で、弥生はようやくまともに喋った気がする。「だって、自分のことしか考えていないあの男と違って、佐久間先生は二人の未来をちゃんと考えてくれているじゃないですか」

「……」

神田はやはり即答できない。

五十嵐はそんな二人の沈黙をを引き取るように言った。

「とにかく、佐久間先生のごことはひとまず置いておこうか」

今日、私たちに話してくれたことが、神田の第一歩には違いない。一歩を踏み出してくれたことで、二歩目をどこにお

くか考えることができる。そして三歩目、四歩目と、左右に振れるかもしれないが、道を進むことができるはずだ。

そんなことを思いながら、五十嵐は結論を言い渡した。「勇太君が、以前の虐待でフラッシュバックを起こしている、ぐらいに、みんなには話すわね。でも、既に専門の医師にカウンセリングを受けて治療に踏み出しているから、あなたたちは興味本位で口を挟まないで黙って見守ってあげてね、って、そんな感じで強く言うておくから。それでいい？」

「はい、主任、本当にすみません」

神田はこれに同意した。

五十嵐主任、いざという時にけっこう決断が早いな、と弥生は少し見直した。

話はこれで終わりそうだったが、弥生はどうしても勇太のことが気になってしかたがない。数少ない、弥生の友だちである。

「ねえ、神田さん、勇太君、今はどうなんですか？」

「山本さん、ありがとう、勇太のことをいつも気にかけてくれて。

今は佐久間先生と外で会うのを控えているから、そのためかどうかわからないけど、少しは落ち着いている感じがするの。

でもまだまだ私にべったりだし、一昨日みたいに、どうしても学校に行けないときもあるのよね。お医者さんも学校の先生も、無理をさせるなって仰っているから、今は勇太の気持ちに任せている感じなの」

「そうですか…。ねえ、今度会いに来ていいですか？」

「勇太に？」

神田は一瞬、考えて、

「ありがとう。そうね、山本さんなら、勇太、会ってくれるかもしれないわね。まず聞いてみるわね」

神田の顔に少し笑みが戻ったように、二人には見えた。

「それともう一つ」

五十嵐がちょっと厳しい雰囲気を出しながら言った。

「私と佐久間先生と、二人で話していいでしょ？」

確かにあなたのプライベートなことだけど、二人とも同じ職場で、さっきも言ったけど何かと影響があるし、スタッフも患者さんも、勘のいい人はもう気付いているかもしれないし。

別に上司風を吹かすつもりはないけど、長く一緒に働いてきた仲間として、やっぱりきちんと佐久間先生の気持ちを確かめておきたいの。

それに…」

と弥生の方を向いて、

「藤堂師長だったら、絶対にそう思うんだ」

弥生は思わず顔がほころんだ。

「確かにそうですね」

弥生と五十嵐は声を出して笑った。

神田は、気にかけてくれる仲間がいる嬉しさと申し訳なきがない交ぜになったような顔をしていた。

★ 5

次の日。

五十嵐は、朝のミーティングで、さっそく神田のことに触れた。

夜勤と日勤が交代する、最もナースが集中する時である。但し神田本人は、準夜勤のため来ていない。

引き継ぎにも時間がかかり、すぐに患者の世話や手術の準備などに追われることになる。しかも、患者はナース室の前を頻繁に往来しているので、窓を閉めていても、聞かれる恐れもある。

神田の件は、要領よく、一瞬で終わらせなければならない。五十嵐は、朝、起きてから、何度も喋ることを心の中で繰り返していた。

さまざまな伝達のあと、神田はひと呼吸おき、弥生と目を交わしてから話を続けた。

「それと、神田さんのことだけど…」

もうみんな、業務に取りかかろうとしていたり、退勤の準備をし始めていたりしていたが、人混みで急に動きを止めるフラッシュモブのように手を止め、顔を五十嵐の方に向けた。「プライベートなことなので、第一ナース室以外には絶対に言わないで欲しいんだけど、小四の息子さんが、一昨年のこととでフラッシュバックを起こして、今、心療内科に通っています。

もう治療方針とかははっきりしているんだけど、いつよくなるかとかは、治療を進めてみないと何とも言えません。

神田さんの勤務シフトこれまでと変わりませんが、もしかしたら、皆さんに迷惑をかけることもあるかもしれません。でも親子で一生懸命、病気と闘いはじめたところなので、私たちが出来る範囲で応援していきたいと思います。

以上です。デリケートなことなので、神田さんに直接あれこれ聞かないように。いいですか？」

最後のひと言は、関美千代の顔を見ながら言った。一番、そういうことをしそうに見えたのかもしれない。

ミーティングが終わったあと、五十嵐の姿が消えたのを確認してから、関美千代と飯野七海がさっそく弥生のところに寄ってきた。

「ねえ山本さんも、詳しく知っているんでしょ？」

美千代が興味津々という顔で聞いてくる。

「詳しく、って言っても、主任が話した通りですよ」

弥生の方が齡上だが、正看の美千代にはずっと敬語を使ってきた。

「勇太君、どうなんですか？」

と、これは七海。

一昨年のDV事件の折、ナース室に退避してきたこともあるので、一番若い七海は、仕事の合間合間に、勇太のことをけっこう構ったりしていた。

なので、五十嵐の話聞いてまず勇太のことを案じたのだろう。具合を聞く七海の声は真剣だった。

これには弥生も答えざるをえない。

「フラッシュバックって、あるでしょ？ それが症状のメインみたいなのね。睡眠障害も時々あるみたいで。とにかく神田さんと離れていると、不安になるらしいの」

さすがにそういう話になると、美千代も真剣な顔になった。

「でも早い段階で専門医の先生に見せたって言うから、時間

はかかるかもしれないけど、いい方向にはいくと思うんですよね」

「そっかー。と言って神田さんだってそうそう休んでもいられないものねえ。ほかに身寄りがいないから、助けてくれる人もいないし」と美千代。

弥生は佐久間の顔が浮かんだが、もちろん言うわけにはいかない。

七海は思い詰めたように「ねえ、いざとなればまた勇太君にここに来てもらおうよ」と美千代に向かって投げ掛ける。

が、美千代は「それは難しいと思うよ。あの時は緊急避難的に院長や事務長が認めてくれたただけだから。

今回は長期戦になるって予想がついているしねえ。あまり仕事に支障が出るようだったら、事務長だって考えるんじゃないかしら」

美千代は決してドライなわけではない。しかし、ギリギリの人員で病院の建て直しに奔走している今、神田をただ無条件に守るわけにはいかないだろう。

何より神田自身が、迷惑をかけるのが常態化すれば、潔く決断するのは目に見えている。若いとはいっても美千代はそれくらいの判断力はあるし、それは弥生も同じ考えだった。佐久間という要素を除けば、であるが…。

五十嵐菜奈は、その日、何とか佐久間と話をしたいと思っていた。

しかし日中の外科病棟は、まず業務以外の時間を作るのは難しい。

その日は、神田は準夜勤で、出勤は午後3時からである。できれば神田が出てくる前に佐久間の胸の内を聞きたかった。

しかし五十嵐の気持ちが通じたのか、階段を一人で降りようとする佐久間を見かけ、五十嵐はチャンスとばかりに追いかけた。

「佐久間先生っ」

追いついたのは、ちょうど踊り場である。

患者はもちろん、スタッフもほとんどはエレベーターを使うから、階段の踊り場は、密室とまではいかないが、意外と秘密が保たれる場所だった。

「ああ、五十嵐主任。どうしたの？」

あまり看護師と交流しない佐久間だが、五十嵐とは、立場上、接することは多い。いつもの業務的なことかと思い、特に不審がることもなく足を止めた。

「先生、昼休みはどうされるんですか？」

「えっ、何、突然。何かあった？」

いきなり昼の予定を聞かれ、さすがに面食らったようである。

「実は神田さんのことなんですけど。

最近様子がおかしいので、昨日、話を聞きました。全部話してくれました。勇太君のこと、それから佐久間先生のことも…」

人の通りが少ないと言っても、誰に聞かれるか分からない。ここでは用件だけ手短かに話すしかない。

佐久間は一瞬、言葉を飲み込んだが、それほど動揺している感じではなかった。

「そうか、恵美子さん、話したんだ…。いや、いいんだけど。

ぼくもそろそろ——別に病院中に公表しなくてもいいんだけど——そろそろ隠しておけないかなって思っていたから」

相手が五十嵐だからか、佐久間はあっさりと認めた。

「それで、勇太君のことでかなり参っているみたいだし、もちろん、勇太君のことを第一に考えなければならぬんだけど。

でもこのままだったら神田さん、病院に迷惑をかけるからって、辞めてしまうんじゃないかって思うんですよね」

その通りだ、と頷きながら、佐久間は聞いている。

「でも私としては、それだけはさせたくないんです。なので、ちょっと相談させて欲しいんです。先生、昼休みに少しお時間いただけませんか？」

「わかったよ。ぼくも主任がそういう気持ちでいるなら、むしろありがたいぐらいだ。

お昼はいつも通り、売店の弁当を買って食べるつもりだったから、そうだな、屋上ででも話そうか」

屋上は、事故防止のため、ふだんは鍵が掛かっている、特に患者は出ることが出来ない。

鍵は事務局にあるので、五十嵐の立場だったら、だれにも咎められず借りることができる。

「わかりました。では屋上で」

五十嵐はさっと踵を返して、また階段を駆け上がっていった。

五十嵐は、弥生には、昼休みに佐久間と会うことを伝えた。「そうですか、すぐに応じてくれたんですね。それは良かったです。それにしても、主任、やるのが早いんですね」

安心したのもあって、弥生が笑みを見せる。

「勇太君のことは長期戦になるかもしれないけど、神田さんのことがねえ。

早くみんなで、“大丈夫、病院をあげて守る態勢ができて

るからね”っていうふうにしないと、“迷惑をかけるから”なんて言って辞めてしまいそうな気がして…。できれば、院長とか事務長も巻き込んで、本当に“病院を挙げて”という形にしたいのよねえ」

「ホントに。それができれば神田さんも安心して仕事が続けられますよね」

弥生は今朝の美千代の話を思い出した。

ナース同士、互いの性格もある程度は分かるから、美千代のように心配する者は多いに違いない。でも、心配するだけでは、神田をつなぎ止めることはできないだろうと弥生は思っている。

それには、五十嵐のように、気持を実際に形に表さなければならぬ。

弥生はあらためて、五十嵐の手の打ち方が早いのに舌を巻いた。

「なーに、山本さん、そんなニヤニヤして」

「いやあ、なんか、主任ってすごいな、って…」

「やめてよねえ、あなたまでそんな、関みたいに人をからかうの…」

「からかうだなんて。ホントに感心しているんです」

「ま、いいわ。佐久間先生から院長にアプローチしてもらおう

ことにして、山本さん、事務長の方は、いずれあなたに頼むことになると思うけど」

「私がですか？」

そんな大役は無理、という顔をしてみせる。

「そうよ。事務長は誰よりもあなたのことを信頼しているんだから。まあ信頼だけじゃないと思うけど」

と今度は五十嵐がニヤニヤする。

「やめて下さい。私は全然、そんなこと思っていないから。私は今の外科のそれぞれの距離感というか、空気感が、このままずっと続けばいいなと思っているんですから」

ちょっと怒ったふりをして、弥生は業務に戻っていった。

五十嵐はちょっとだけ、事務長の雅之のことが可哀想になった。

次期理事長が決まっている副理事長として、縁談もひっきりなしに届いているという話は聞いている。でも雅之は、すべてを話の段階で断っているという。

その理由が弥生であることは、少なくともナースは皆、分かっていた。

しかし雅之も、根が真面目なのか、純情なのか、弥生にあからさまにモーションをかけることはない。

弥生は雅之の気持ちに気付いていないのか、気付いていないふりをしているのか、親しそうに話しかけることはあっても、ある一線からは越えない、という態度を取っている。

今は正看護師を目指して学校に通っている身だから、自分を律している、というのもあるのかもしれない。

もし理由がそれだけなら、晴れて正看になったときに、雅之もさすがにはっきりと行動を起こすだろうし、弥生も受け入れるに違いない。

でも五十嵐は、なんとなく、それだけではないように感じていた。

それが弥生の生い立ちによるものかどうか、そこまでは分からなかったが…。

★6

午前中の業務が終わり、弥生はいつものように学校に向かった。

それを見届けてから、五十嵐は事務局に鍵を取りに行った。

しかし、「あれ、先ほど佐久間先生が持って行きましたよ」と事務員。「珍しいですね、ふだん、屋上になんて滅多に誰も行かないのに」と首を傾げる。

「あ、うん、ちょっと不要なものを置く場所がないかなあつ

て、ちょっと見たかっただけだから。急いでないし。あとでも構わないわ」

あわてて誤魔化して、五十嵐は屋上に向かった。

屋上には、ベンチが一つだけ置いてある。

以前は自由に出入りできたときもあった。しかし、星見ヶ丘病院では一回もなかったが、屋上からの自殺が頻発した時があり、今はほとんどの病院が、屋上を閉鎖している。

このベンチも、屋上が使われなくなったあと、単に処分されなかったというだけのもので、風雨にさらされて色褪せている。

佐久間はそのベンチに座り、菓子パンを嚙っていた。

「佐久間先生、もういらっしゃってたんですね。すみません、遅くなって」

五十嵐が頭を下げた。

「大丈夫だよ。きっと長い話になるだろうから、少しでも早くから話し始めた方がいいかなって思って」

特に愛想笑いをするでもなく、淡々と佐久間は応えた。

決して無愛想だとかクールだとかいうのではない。佐久間の“地”がそうなのだろう。五十嵐もその“地”を理解するまで、けっこう時間がかかったが、今はもう慣れている。

いやむしろ、誰に対しても誠実だし、分け隔てをすること

もない。ただ、感情の表し方が、人より少しばかり乏しいだけなのだ。

もしかしたら、長年、後藤前院長の陰に隠れて、無色透明の存在に徹してきたことが、この佐久間の“地”を作ったのかもしれない。

「お昼、まだなんですよ？　こんなので良かったら食べないか？　あと缶コーヒーも買っておいたよ」

やはり表情を変えずに佐久間が勧める。たぶん、佐久間なりに、気を遣ったり思いやったりしているつもりなのだ。五十嵐はありがたくその好意を受けた。

「で、恵美子さん、いや、神田さんは、どこまで話したの？」

パンを頬張りながら、佐久間は聞いた。おそらく、一番気になっている部分だろう。

「恵美子さん、でいいですよ」

五十嵐はにっこりと微笑んで、まずそう告げた。

「たぶん、一通り全部、話してくれたんだと思います。佐久間先生が、家族として神田さんを支えながら勇太君の治療に取り組むって決意している、ってことも」

五十嵐は、もらったパンを指で小さく千切りながら、口に運んだ。

「そうか…。さっきも言ったけど、ぼくは、院長にはもう話さなければと思っていたんだ。でも恵美子さんがね、それはもう少し待ってくれって言うんだ。

そのことは何か言ってたかい？」

「いえ、それは今初めて聞きました。でも佐久間先生、私、なんとなく分かるんですけど、神田さんは、やっぱりまだ迷っているんだと思います」

「何を？ ぼくとの結婚をかい？」

「はい…」

「どうしてだろう…。ぼくは恵美子さんも勇太君も、何があっても最後まで守り抜くって、何度も何度も言ったんだけどなあ。そんなに頼りなく見えるのかなあ」

「いえ、佐久間先生、そうじゃなくて…。

一昨年、DVを受けていた件は、もちろんご存知ですよ。

あの時は、うちの山本がたまたま見付けて、でも山本は、子どものためにすぐに別れるべきって強く言ったんだけど、神田さん、最初は拒否したんですよえ」

「えっ、そうだったの？ 何で？ そいつのために苦しんでいたんだろ？」

「それはそうなんですけど…」

あの時、神田は、「あの人に捨てられたら生きていけない」、

そう言ったと、あとで弥生から聞かされた。

DVを受けながらその男と別れられない女性は、けっこう多い。五十嵐は、立場上、そういうケースをいろいろと見てきた。ケガをするまで暴力を受け、病院に担ぎ込まれることも、少なくないのである。

何をされてもその人が好き、というのは、むしろ稀であろう。愛情ではなく、依存心なんだろうと、五十嵐は思っていた。

暴力を振るわれるというのは、言い換えれば、自分に眼が向いている、ということでもある。負の方向であっても、自分を見ていてくれる人がいることで、自分が存在していることを確認することができる。

実際、男の呪縛が解けてから、神田は、男への未練などまったく見せなかった。

でも、神田のそのセリフを佐久間にそのまま教えるのは、さすがに無神経すぎる。五十嵐は言葉を選びながら、ゆっくりと喋りはじめた。

「神田さんが不安に思っているのは、佐久間先生の誠意のことではないと思うんです。

私は神田さんとは同年代だし、付き合いも長いから、たま

に二人で呑みに行っては愚痴をこぼし合ったりしてきたんですよね。ま、勇太君がいるから、年に数回ぐらいのことですけど。でも、けっこう、互いのことは分かっているつもりなんですよね。

佐久間先生は、神田さんの前の御主人のこと、お聞きになってますか？」

「うん、女を作って出て行った、ぐらいしか聞いていないけど…。勇太君と月に一回会うことになっていたけど、結局、一回も会いに来なかったんだらう？」

「ええ。これ、私が話すのはルール違反かもしれないけど…。

神田さん、その頃は前の病院だったんですけど、ナースが足りなくて、とにかく忙しいところだったみたいで。勇太君が1歳になるまで産休を取っていたんですけど、病院から頼まれて、10カ月になる前ぐらいに、病院から戻ってきてって頼まれたんです。

で、勇太君を乳児保育園に預けて仕事を再開したんですけど、御主人の浮気が始まったの、それからなんですよね」

「へえ、そうだったんだ…」

佐久間はパンを食べる手を止めて聞き入っていた。さすがに神田からその辺のことは詳しく聞いていなかったのだらう。

五十嵐は話を続ける。

「それで神田さん、御主人よりも自分を責めたんですよねえ。私の仕事が忙しいから、私がつい勇太ばかり構うから、って。実際、産休を短くされたぐらいだから、忙しかったのは事実だし、勇太君のことだって、まだ一歳にもなっていないんだから、手がかかるの、当然ですよ。

だから御主人だって、本当は神田さんを支えなければいけないのに、それが重たかったのか、それとも元々女にだらしない男だったのか…」

五十嵐はもちろん、元の旦那のことを良くは思っていない。神田から聞いただけの、一度も会ったことのない男だったが。

「でも神田さん、自分がいけないからって…。そういう人なんです。御主人に慰謝料も請求しなかったんですよ。養育費だけはもらうことになっているみたいですけど、それも時々滞っているみたいで…」

「ああ、養育費のことは聞いているよ。でも結婚したら、そんなの当てにする必要なんかないのになんて言っているんだけどなあ」

「いえ、佐久間先生、だから神田さんは、先生の気持ちを疑っているのではなくて、自分が我慢することで人に迷惑をかけなくて済むなら、そうしたい、っていう考えをする人なんです。

勇太君と二人でひっそりと暮らしていけば、佐久間先生に

も別な可能性が開けるんじゃないか、って。

でもそれって、依存心の裏返しだと思うんですよね。本当は佐久間先生に寄りかかりたい。でも寄りかかることで、佐久間先生に重たいものを背負わせたら、また離れていってしまうんじゃないかって」

「だからそれは——」

佐久間が言いかけたのを五十嵐は遮って続ける。

「それとね、佐久間先生。先生、まだ神田さんにきちんと『結婚して下さい』って言っていませんよね」

「いや、それは——」

佐久間は虚を突かれたように言葉をいったん飲み込んだ。

「いや、そんなことはないさ。そりゃそういう言葉は言わなかったかもしれないけど、勇太君の病気を三人で乗り越えていこうって、それは何度も言っているんだから、それがプロポーズだって分かってくれているはずだよ」

「先生、それはダメですよー」

五十嵐はわざと厳しい顔つきをする。

「女性はですね、そういうけじめの言葉がすごく大事なんです。確かに、そういうことが気にならない女性もいますよ。でも少なくとも神田さんは、その言葉が大事なんです。いろいろ傷付いてきているから、そのけじめの言葉で次の一步を踏み出すことができるんです」

五十嵐は熱く語る。

「……うーん、そういうものなのか……」

「そうですねー」

「いや、お恥ずかしい話なんだけどさ、ぼくは恋愛経験がもちろんまったく無いわけではないんだけど、結婚したいと思える女性に出会ったのは初めてなんだ。ただ、この年齢だろう？ 甘い恋愛気分はもういいのかなって…。

それで勇太君の病気をどう乗り越えていくか、そういう生活設計というか、人生設計というか、そっちの方が大事になって思ったんだよね」

佐久間はそう話すと、缶コーヒーを口に含んだ。きっと恵美子以外に、自分の心の内を見せたことなどほとんど無くて、喉がひりついたのだろう。

五十嵐はそんな佐久間がなんか可愛く思えてきた。

「そりゃ神田さんだって、甘い恋愛気分に浸りたいなんて思っているわけではないと思いますよ。でも先生、くどいようですけど“けじめ”ですから、それは本当にお願ひしますね」

「いや、わかったよ。いやあ、まさかここで主任から恋愛指南を受けるとは思わなかったな…」

そういつて佐久間は苦笑した。別に気分を害したわけではなさそうだ。

「私は神田さんにずっとここにいてもらいたいと思っている

んです。でも勇太君の治療が長引いて勤務に差し障りが目立つようになると、神田さんのことだから、絶対に辞めるって言い出すと思うんですよね。

だから、浜田院長も後藤事務長も巻き込んで、病院を挙げて神田さんの味方になるよ、って。そこを神田さんに分かってもらいたいんです」

「うーん…。

正直、ぼくは、ぼくたちの個人的な問題としか捉えてなかったけど、確かに主任の言う通りかもしれないな。

わかった。まずきちんと結婚を申し込んで、そして院長にも事情をすべて話すよ。事務長にも、ぼくから言った方がいいのかい？ プライベートな話はあまりしたことがないんだけどな…」

「いえ、事務長には、折を見てこちらから話します」

佐久間はおそらく、雅之の弥生への想いなど気付いてはいないだろう。もちろん、今、教えるべきことでもない。でもいろんなことが順調にいけば、そう遠くないうちに、神田と佐久間に続く職場結婚が見られるだろう。

この時の五十嵐は、そう予感していた。

昼休みと言っても、入院患者を担当する第一ナース室の看護師は、その時間を丸々休憩に充てられるわけではない。

昼休み自体、交替制となっているが、患者からは細かいことでさまざまな呼び出しがかかるし、出された昼食がちゃんと食べられているか、気になる患者の分は、やはり自分の目で確かめないと気が済まないものである。

幸い、星見ヶ丘病院は、院内に職員も一般の人も利用できる食堂があり、二交替制となっている昼休みのさらに前後30分ずつを延ばして営業時間としているので、みな、正規の休憩時間に囚われることなく食事を摂ることができる。

もちろん、あまり勝手な時間に休憩を取ると收拾がつかなくなることもあるので、基本は交代のシフトに沿いながらも、そこは長年の経験と習慣で、それぞれ、業務と休憩をうまく回している。

そういうことから、看護師は、今日の五十嵐のように、昼休みのほとんどの時間、姿を消すことは滅多になく、もちろん五十嵐は私用で外に出てくると言って佐久間と会っていたのだが、その分、戻ると、帰還を待ちわびていた部下の声が、あちこちから上がっていた。

できれば、佐久間と話した内容を、早く弥生にメールで伝えたかった。でも物事の優先順位は弁えている。しばらくの時間、めまぐるしく業務をこなし、やっと携帯に向かったのは、午後3時を過ぎていた。

(でも、焦ってメールしたって、山本さんが授業で見られないのよね) 逸る自分の心に苦笑しながら、五十嵐は携帯のキーを押し始めた。

一方、佐久間も、意を決して動き出していた。

今日は午前中は外来担当だったが、午後からは手術の予定もなく、比較的自由な時間である。

と言ってもヒマというわけではなく、正規のカンファレンスを行う時もあるし、同僚医師との小規模な意見交換も頻繁にある。それに新しい論文にも目を通さなければならないし、業者などの来客も少なくない。またその日に手術がなくても、数日後に予定が決まっていれば、けっこう準備に時間をかけたりするのだ。

ただ、カンファレンスを別にすれば、いずれも自分でタイムスケジュールを組み立てられるので、気持の上では余裕が持てる。

たまたま、今日は手術もカンファレンスもない。なので、五十嵐と話したあと、今日のうちに浜田院長に話そうと決めたのだ。

昼休みが終わる直前、佐久間は院長室を訪れた。

浜田の人柄なのか、ドアはふだんは開放されている。佐久

間は部屋に入るとドアを閉め、さらに小声で話しかけた。

浜田は少しだけ訝しげな顔をした。

「実は、個人的なことでご相談したいことがあります。午後は私、手術もカンファレンスもないので、時間が自由になるのですが、院長、どこかでお時間いただけないでしょうか」

「なんだい、突然、そんなにひそひそ声で。どこかから引き抜きにでもあったかね」

浜田は冗談めかして聞いてきたが、けっこう本気で心配している眼をしている。佐久間は慌てて否定した。

「いえ、違うんです、そんな話ではないんです。純粹にプライベートなことなんです」

「そうか」

佐久間のその返事だけで、浜田は安心を取り戻したようだ。手帳を繰りながら、

「そうだな、ちょっと来客もあるから、3時半なら確実に空くかな。いいかい？」

「はい、私も大丈夫です。では3時半に伺います」

浜田の穏やかな顔に見送られ、佐久間は再びドアを開放にして院長室を後にした。

医局に戻ると、佐久間は初めて「こりゃたいへんだ」とつぶやいた。何しろ、昼休みに五十嵐に会うまで、院長に話す

ことは、まだまったく考えていなかったのである。いずれは言わなければとは思ってはいたが、衝動的と言えば衝動的である。

(あと2時間半で、話を組み立てなければなあ)

そう思うと、もう一つ大事なことに気付いた。神田から、まだ結婚の正式な承諾をもらっていないのだ。五十嵐からは、自分が正式にプロポーズしていないから、神田も心が揺れているんだと指摘された。

でも、正直なところ、あれほど二人で将来設計のことを語りながら、それでも「結婚して下さい」が必要なのだろうか、という気持は拭えない。

まあだから、「女心を分かっていない」と五十嵐から突き付けられたわけだが。

(まあでも仕方がない。もう院長に言っちゃったからなあ)

そう思いながら、院長には神田が揺れていることについて相談する、という態をとるか、などと、話す順序を考えるのだった。

五十嵐からのメールが弥生の携帯に届いたのは、あと数分で休み時間に入る、という時だった。

准看護師とはいえ、現役の現場のナースである。ふだんか

ら、緊急の連絡に気が付くよう、マナーモードにしながらも、携帯は首から提げ、胸ポケットに入れている。もちろん、授業中は一切出られないが、この定時制のクラスは、弥生のように現役のナースも何人かいて、それらの受講生は、同じように、携帯の呼び出しに気付くように持ち歩いている。

そして、マナーモードであっても、掛かってくれば振動音が鳴るため、静まりかえった時などは意外と教室中に聞こえるものであるが、弥生の携帯が振動したときは、ちょうど講師が一生懸命に話している時だったので、周りには気付かれなくて済んだようだ。

授業が終わると、弥生は教科書やノートをしまうのももどかしく、メールを開いてみた。

何事にも合理的な五十嵐らしく、文面は割と短いものだった。

「佐久間先生と話しました。

神田さんに正式に話すべきと言ったら、理解してもらえました。

また、院長にも、近日中に話すと言ってました。

ほぼ、私たちが望んだ方向に行っていると思います。」

第三者が見たら、何のことか分からないだろう。五十嵐は万一、周りから見られてもいいようにこういう書き方をしたのだと、弥生は思った。藤堂には及ばない、と、師長に就くことを拒んだ五十嵐だったが、気遣いもあり、信頼もされ、十分、師長の役割を果たしている。早く正式に師長に就いて欲しいと、弥生はあらためて思うのだった。

★ 7

一方、佐久間は、浜田院長と約束した時刻が迫ると、さすがに緊張を覚えた。

ふだん、医療や病院のことに関わるどんな話でも、そして意見の相違があつたとしても、心を乱すことなく話ができる人間関係を築いている、そう思っていた。

しかし、純粹にプライベートなことを話すのは、初めてかもしれない。同僚医師であれば、相手が先輩であろうと、感覚的にはほぼ対等であるし、プライベートなこともまったく話さないわけではない。

佐久間は勤務後に呑みに行くことはめったにないが、それでも行事的な呑み会は、年に何度かある。そういう時に仕事の話をするのは野暮というものだったし、家族が何人いるかとか、出身がどこか、なんていうことは、あえて秘密にして

おくことでもない。

なので、医者同士、あるいは一部の看護師も含めて、本当に表面的なプライバシーは、ある程度、互いに分かってはいる。しかし浜田とは、そうした酒の席でも、まず個人的な話はしてこなかった。大抵は、浜田の方から、病院内での仕事のしやすさとか、そういう話を振ってくることが多いからだ。

院長という立場であれば、それは最大の関心事の一つであることは分かるし、佐久間相手にだけではなく、他の誰彼を掴まえてもそんな話ばかりする浜田を、佐久間はむしろ、病院の職場としての環境も良くしていこうと常に心がけている、と好意的に捉えていた。

3時半きっかりに院長室につくように、佐久間は医局を出た。「ちょっと院長のところに行く」という説明も、日常のことであり、周りは何の反応も示さない。何人かが、「はい」と、佐久間の顔も見ずに送り出した。

院長室は、相変わらずドアが開け放されていた。

ノックをする代わりに、「院長、佐久間です」と声をかける。先ほど訪問したときと同じように、部屋に入るとドアを自分で閉めた。

「はい、ご苦労さん。まあそこに掛けて」

浜田は眼でソファを示し、コーヒーを淹れようと立ち上がった。

院長と言っても秘書がいるわけでもなく、お茶出しも全部自分でやらなければならない。浜田は元々小さな外科医院を経営していた身なので、その辺は何の抵抗もなさそうだった。慣れた手つきでコーヒーメーカーに挽き豆と水をセットし、スイッチを入れると、応接ソファの佐久間の真向かいに座った。

「昨日手術した山川さん、経過は順調かね」

「はい、予定通り、来週には退院できると思います」

「そうか」

別に山川さんのことを特に気にかけているふうではなく、直近で手術した患者さんのことを単に聞いただけのようであった。

「それで、話というのは？」

「はい、院長とはこういう話をしたことがないので、ちょっと緊張するのですが、実は、結婚を考えておりまして…」

あとに続けることばを探す佐久間を庇うように、浜田はすぐに聞き質した。

「ほう、それはめでたい話じゃないか。で、相手はどんな方なの？」

浜田の顔が少し緩んだように見える。

「はい、実は、うちのナースなんです」

「なに、うちの？」

「はい、実は、第一の神田さんですって…」

佐久間は相当緊張しているのだろうか、話す度に、いけないことをした言い訳のように「実は、実は、」と繰り返していた。

「神田さんって、あのシングルマザーのかい？」

さすがに浜田は、スタッフのことは押さえているようだった。

「はい…」

佐久間はもう、次に何を言うべきか、分からなくなり始めていた。ふつうなら、日取りを伝えるとか、院長に仲人をお願いするとか、そんな段取りなのだろうが、これからやっかいな話をしなければならぬ。どういう順番で話せば分かりやすく伝わるか、その辺から考えられなくなってきたのだ。

佐久間はしどろもどろになりながら、神田に交際を申し込んだこと、しばらく付き合ったあたりで神田の息子がPTSDを発症したこと、そのことに対して家族として立ち向かっていこうと決意していることを、何とか伝え切った。

「佐久間先生…」

しばらく沈黙が続いたあと、浜田が口を開いた。

「私はね、佐久間先生、院長と言っても、この病院では外様だからね。佐久間先生のようにこの病院の歴史を肌身で知っているわけではないし、ドクターやナースだけでなく、事務方のみんなだって、きっといろんな歴史をこの病院と共有してきたのだろうけど、そういったこともほとんど分からない」

次のことばを探しているかのように、浜田はコーヒーカップに口を付けた。

「でも逆に言えば、いろんな縛りに囚われることなく、病院の将来像を描くことができる。実は理事長から院長を任されたとき、そのことを強く言われたんだよ。外からの、色のついていない目でこの病院を眺め、変えるべきところは積極的に変えていって欲しい、とね。

幸い、経営は理事長や事務長が細かいところまで見ながら全体を把握しているから、私はまあ、運営のことだけ考えればいいということになっている。もちろん、それだって、無駄な経費を使わないようにとか、それなりにいろいろ考えてはいるんだがね」

佐久間は、浜田が少しニヤッと笑ったようにも見えたが、追従笑いをしてもいい場面に思えなかったし、何より浜田がこの先、何を言おうとしているのか、その意図が掴めず、ただ「はあ」と相槌を打つしかできなかった。

「だから、今、君から縁談——と言っていいのかな、話を聞

いて、無条件におめでとうを言うわけにはいかないんだよ」

このことばで、初めて、佐久間は浜田が神田との結婚に賛成しているわけではないことに気付いた。

「それは、ぼくの結婚に反対ということですか？」

余計な言い回しを考える余裕は、もはやまったくなかった。まさか、反対されるとは思わなかったからである。これまで、浜田とはプライベートな付き合いは、ほとんどなかっただけに、上司とはいえ、自分の人生をなに左右しようとするんだ——そこまでの感情が急に湧き上がり、反問することばにも怒気が滲んでいたのかもしれない。

浜田は慌てたように、佐久間の顔の前で手を振った。

「違う、違う、まず、聞いてくれないか」

佐久間の表情も陰しくなっていたのだろう。浜田は言い訳をするように、饒舌にしゃべり始めた。

「私はね、佐久間先生、君には、今すぐではないけど、ゆくゆくは、外科を率いる立場についてもらおうと思っている」

浜田はまた、佐久間の意表を突くことを言い出した。

「ここは病院といっても、柱は外科と内科だけだ。小児科だって、医師はほとんどが内科と兼任している。そのせいか、あるいは理事長の“ワントップ”でいいという考え方もあったのだろうが、医師に序列は無かった。

私がここに来てまず面食らったのは、そこだよ。

赴任したときに、外科部長や内科部長がいないのか、理事長に聞いてみたことがあるが、ご自身がすべてを兼ねているという仰り方だった」

それは佐久間もよく分かる。各科に医局はあっても、医局長も科長も存在せず、前院長でもある理事長が、すべてを掌握し、すべてを判断してきたのだ。

研修医だったときの、大手総合病院でのビクともしないヒエラルキーは、ただ鬱陶しいだけだったが、正式な医師としての勤務がここしか経験のない佐久間にとって、いつの間にか、この組織形態が自然な環境になっていった。

後藤前院長は、医師にとってただ一人の上司で、業務上のことはただ後藤に伝わればそれでよく、たとえば外科の場合、一人の患者に接するチームは、後藤がその顔触れを選んでカンファレンス等を行っていた。もちろん、そのメンバーの間では、後藤の指示が無くても、さらに必要な打ち合わせや検討を行うこともあるが、その患者が退院すれば——時には死亡というケースもあるが——それでチームは自然に解散する。

内科の場合、一人の患者に着く医師はたいてい一人で、その一人に何かあったときのために、予備の担当者を置くが、出番はほとんどない。なので、チームという感覚も、特にな

いようだった。

星見ヶ丘病院程度の規模の病院はけっこう多く、院長なり理事長がワンマンで知られているところも少なくないが、ふつうは科長や医局長を置き、医師のステータスを上げることで、患者への安心感に繋げている。

医師にとっても、たとえトップに一切逆らえなくても、地位が上がることは名誉欲を満たすことにもなり、それが、医師同士が競い合う競争原理にもなる。

前院長時代、他の医師連中がなんとなく影が薄かったのも、そういう競争原理が働いていなかったからではないか、と、浜田はしばらく病院内を見ていて思ったのである。

でもそうした理由には触れずに、浜田はことばを続けた。

「ただ、後藤理事長が院長を退いてからは、少し変わってきたと思わないかね。まあ私も新任で頼りないし、たぶん先生方は、寄りかかる上司がいなくて、自立心というか、それまで以上に責任感が芽生えたのではないかと、私はそう見ているんだよ」

それは佐久間もはっきりと感じていた。もちろん、浜田が頼りないということはなかったが、どこまで心を許して頼っていいのか、というのは、皆もあつたに違いない。しかし結果的に、医師たちは、それぞれに個性と実力を発揮し始めた

のは間違いなかった。

浜田は話を続けた。

「それでね。これはまだ私の頭の中にあるだけだから、ここだけに留めておいてほしいのだが、科長や医局長の役職を置こうかと思っているんだ。

今の星見ヶ丘のドクターは、確かに皆、仲がいい。それがこの病院の空気を明るいものにしてしているのは私も認める。しかしいい意味での競争心も、組織としては必要ではないのかな。そこの厳しさが少し欠けているように、私は思うのだが…。

もちろん、馴れ合っているとは言わないし、患者の命に真正面から向き合う峻厳さも、欠けているとは思わない。ただ、それぞれのやることに対し、お互いに意見をぶつけ合い、時には否定することだってあってもいいんじゃないのかな。よく言えば、尊重し合っているとと言えるのだろうが、本当はこうした方がいい、ということまで、押し殺していないだろうか。

まあ、そういう空気になれば、人間関係には、そりゃ緊張感も生まれるだろう。だからこそ、外科にしても内科にしても、組織の責任者をちゃんと置いて、そういう交通整理をしてもらいたいし、私だって雇われ院長だからね、後継者の育成ということも真剣に考えなければならないんだよ」

そこまで一気に喋って、浜田はまたカップに手を伸ばした。

佐久間は、浜田の言うことはもつともだと思った。いろいろ、指摘するところも、ほぼ当たっていると思う。あまり思い出したくない、研修医時代の大学病院のあの崩れざるピラミッド組織は、もう二度と御免被りたいが、あの緊張感と重苦しさが、医師としての技量だけでなく、どこの病院に行ってもそれなりについていける、人間としての強さとか、厚かましさとか、世渡りのうまさだとか、そういうものを育てているのかもしれない。

そしてその重苦しさに耐えきれずドロップアウトしていく研修医も少なからずいると聞いていたが、そういう者に対し、ドクターやナースが驚くほど無関心だったのは、そこを乗り越えられなければ、どこに行っても通用しないことを知っていたからなのだろう。

佐久間は口を開いた。

「いや、院長の仰ること、よく分かります。私は研修医時代病院がガチガチのピラミッド組織でしたから、ここの生ぬるさというのが特殊であることも分かっています。他の先生方も同じでしょう。だから、院長がこの病院の将来を考えて機構改革をなさるのでしたら、及ばずながら協力させていただこうとも思います。ただ…」

一瞬、言い淀んだが、佐久間は一番聞きたいことを言った。「それと私の結婚と、どういう関係があるのでしょうか。私が結婚することで、院長のご構想に何か不都合があるのでしょうか」

佐久間は、もしかしたら縫うような眼を浜田に向けていたのかもしれない。

浜田もまた、哀しそうな眼をして、佐久間をしばしの間、見つめるのだった。

「佐久間先生は今、四十一歳だっけね。神田さんはいくつだったかな。三十五、六ぐらいだったかね」

浜田はこういう風に、職員のことにはけっこう押さえている。「三十六歳になったところです」

佐久間は答える。

「そうか。年齢的には、釣り合いが取れているんだな。

いや、佐久間先生、ざっくばらんに話すが、私は神田さんに対しては、特に含むことは何もない。業務の上でしか接したことはないが、真面目で、ナースとしての技量もいいのではないかと思っているよ。

だけどね、さっきも言ったとおり、私は佐久間先生を、重要な立場に抜擢しようと思っていた。そしてそれは、単にステータスとしての地位を与えるだけでなく、とんでもない重荷を背負ってもらうことにもなると思っている。

今はみんな仲が良くても、そこに上下関係が生まれたとき、穏やかに思わない者だってきっと出てくるだろう。反発する者も、もしかしたら足を引っ張ろうとする者だっているかもしれない。君だって、同僚医師の判断を真っ向から否定したり、指示したり、簡単にできそうかね？」

「それは――」

それは、確かに佐久間には思い浮かばないことだった。

医局の雰囲気は良くても、佐久間には友人と呼べる同僚はいない。それは佐久間の性格にも依るだろうが、医局の連中でも、勤務帰りに連れ立って呑みにいく姿は見かけるものの、プライベートでも付き合ったりしている様子はない。あらためて考えてみると、雰囲気の良さというのは、結局、表面的な馴れ合いだったのかもしれない。そう思うと、佐久間は愕然とするしかなかった。

ことばの続かない佐久間を引き取って浜田は続ける。

「だから、神田さんとの結婚は、何も無ければ、当然私も祝福したと思う。その息子さんの話を聞くまではね。

外科医と言っても、メンタルヘルスのことは、今、現場に立つ者にとっては、無関心では済ませられない分野だ。ここ何十年かで、人間の精神の力が弱まってきたのか、それとも以前は病気という範疇で捉えていなかったただけなのか、それは分からないが、私だってね、治療法ではなく、メンタルへ

ルスを取り巻く状況の変化については、それなりに勉強はしているんだよ。

だから、神田さんの息子さんのこと、私は個人的には精一杯応援はしてやりたいと思うが、恐らく、家族は莫大なエネルギーを吸い取られることにもなるんじゃないのかね。

新たな組織がスタートするのは、まだ一、二年先のことになるだろうが、君が家庭での重荷を背負いながら、新たな組織で未経験の重圧を受けることが本当に可能なのかどうか、私は今、君の話を聞いて、まずそのことを思わざるを得ないんだよ」

だが、佐久間はやや慚然としながら反駁した。

「家庭での重荷と仰いますが、愛する者と一緒に暮らすことは、支えにもなり、励みにもなります。勇太君——息子さんの名前ですが、勇太君だって身体的なハンディがあるわけではないし、介護が必要なわけでもありません。もちろん、長期戦になるかもしれないことは担当の先生からも聞いていますし、私も決して甘く見ているつもりはありませんが、仮に仕事で重圧を受けることになったとしても、それは同じ種類のマイナス要素では決してないと思うんです」

そこまで言って、佐久間もまたのどを潤すかのように、コーヒーカップに手を伸ばした。

そんな佐久間の手の動きを見ながら、浜田は少し微笑んだ

かのように見えた。

「佐久間先生、先生は本当に真っ直ぐだな。いや、からかって言っているんじゃないよ。その真っ直ぐさが、私が信頼するところでもあるのだが。

念のため言っておくが、私は決して結婚に反対しているわけではないからね。君の個人的な幸せを捨てて人生を病院に捧げてくれと言うつもりもない。只々、いろんなことを一気に背負うことへの心配なんだよ」

「仰りたいことは分かりますが、神田さんとのことは、今の私には、優先度の一番高い事柄なんです。すぐに結婚すると言っても、いろんな準備で二、三カ月は先になると思います。でも院長が考えている機構改革は、来年、再来年の話ですよ。それがスタートする時に、私が、私生活の状況も含め、適任ではないと判断されるのでしたら、私はそれで一向に構わないと思っています」

佐久間はきっぱりと言ったつもりだった。

しかし浜田は、

「まあ結論を急がんでくれよ。佐久間先生は佐久間先生で、この病院をどうすることがいいのか、今の立場に関係なく、あれこれ考えてもいい年齢ではないのかね。結婚を第一に考えるにしても、病院のこととセットで考えるべきではないのかな。自分は経営者でも役職者でもないから病院の将来は知

らない、というのだったら、むしろ家族すらキチンと守れなくなるんじゃないのか。私はそう思うよ」

そう言って真っ直ぐに佐久間を見つめた。

佐久間は、確かにその通りだと思った。この居心地のいい病院の雰囲気慣れて、結局は他人が操縦する船に最後まで乗客として気楽に揺られていればよい、そんな考えがこの齢になるまで変わらなかったことに、恥じ入るような気持ちが湧いてくる。

「いや、院長、分かりました。今、どうしますという結論は出せませんが、病院の将来という要素を含めて、結婚のことは捉え直します。また結論が出たら、ご相談させて下さい」

「分かった。いろいろと頼むよ」

浜田は手を差し伸べた。多分、この病院に来て初めてのこともかもしれない。

佐久間はおずおずと差し出した手を握った。

(続く)